
想いの調べ

樹島 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いの調べ

【Nコード】

N4328H

【作者名】

樹島 新

【あらすじ】

怪談ものの短編集にしていこうと考えています。霊が留まるいろいろな想いを含んだものを書いていく予定です。不定期で更新していくので、季節はずれの冬などにも投稿するかもしれません。

1日目：夏の思い出（前書き）

夏のお祭り。夏の楽しい思い出の一つになる、そんなある日の出来事。

1日目：夏の思い出

真夏の蒸し暑いある日、夜でもその暑さは続くものの、お祭りの日はその中でも特別で少しは暑さを忘れられる。

まさに今日がその日である。近くの神社で行われている小さなお祭り。私はつい先週着付けた新しい藍色の浴衣を身に纏い、彼との最初の夏の思い出作りに出かけた。

神社の下階段の所に彼は先に立っていた。私に気づくといつものはにかんだ笑顔で手を振ってくれる。近くまで行くと少し照れ臭そうに言ってくれた。

『とても…素敵だよ。』

その顔と言葉だけでも、私は十分な程の思い出ができた。

露店を一通り回り、祭を楽しんだ。賑やかな露店沿いから離れて、人気のない近くの池の側にやってきた。賑やかな声は小さくなり、私たちだけになる。鼓動が早くなるのを感じた。

『ちょっと待ってて。な、何か飲み物を買ってくるよ。』

彼もそう感じたらしく、私が止めようとする前に行ってしまった。せつかくいい雰囲気だったのに…。そんな風に思いながらも、その奥手なところも好きだったりする。

少し待っていると後ろからペタペタと足音が聞こえる。サンダルの子音。彼はそんなものではなかったはず。一体誰かと振り返えた。

そこには少女が立っていた。小学生くらいの幼い女の子。桃色の浴衣を着て、手には金魚が入っているようなナイロン袋を持っている。

「どうかしたの？」

一人だけで、今にも泣き出しそうな目でこちらを見ている。安心させようと、できるだけ笑顔を見せた。

『お母さんが、いないの…。』

迷子になっちゃったのね。彼はまだ戻ってきていないけど、すぐに戻ればいいわよね。

「なら、お姉ちゃんと一緒に探そうつか。」

『うん！』

さっきまでの暗い顔が嘘のように明るくなった。私も自然と笑みがこぼれた。

祭に来て迷ったのだから、神社の方に行けばきっと会えるだろう。女の子と手を繋いでゆつくり歩いていった。

『あっ！お母さんだ！』

神社まで戻るとすぐに親御さんが見つかった。向こうはまだこっちに気がついていないみたいだ。

『ありがとう、お姉ちゃん！』

女の子はペタペタと音をたてながら駆けて行った。彼が待ってるかもしれない。そろそろ戻ろう。

『どこに行ってたの？心配したわよ。でも、良かったわ。』

『あのねえ、お姉ちゃんに連れてってもらったの。』

『どこにいるの？』

『あれ…？どつか行っちゃった。えーと、赤いチョウチョさんのユカタきてたんだあ。』

『なら、また会ったお礼言おうね。』

『うん。』

その夜、池周辺で女性の遺体が見つかった。共に祭に出かけていた恋人が発見、通報した。女性は腹部を鋭利な刃物で刺されており、藍色の着物には血が広がっていた。警察は財布の入っていたバックがなくなっていたことから、物取りの線で捜査を行っている。

- 終 -

1日目：夏の思い出（後書き）

いかがでしたか？

今回の霊は自分が襲われ、殺されたことに気づいておらず、楽しい思い出の中に身を置き続けています。

蝶の模様は言うまでもないと思いますが、殺された彼女の血です。その後の彼女の霊がどうなったかはまた別のお話に… ないかもしれません。

2日目：花言葉は初恋（前書き）

小さい頃の淡い初恋の思い出。

2日目：花言葉は初恋

幼い頃 - だいたい小学三、四年の時 - 人生初の心霊体験をした。その話をしようと思う。

夏休みに母方の実家に帰省したときのことだ。

そこは山に囲まれ、周囲には家はほとんどなく、水田がどこまでも続く、そんな絵に描いたような田舎だった。他の従兄弟たちは何もない、と家の中で持参した本やらゲームやらで時間を潰していたが、当時の私にはその行為が信じられなかった。森や川 - いや、一歩外に出ただけで都会で見えるいつもの景色と真逆のそれに、どうして興味を覚えずにいられるのだろう、と。まあ、ガキだったからこそそう思うだけで、中高生にまで年の離れた従兄弟たちがそう思うかと言えば、ノーだ。だから、当時の私は一人で遊ぶしかなかった。

それでも、遊ぶものはたくさんあった。それこそ目に入るもの全てに興味を惹かれる。いくら毎年着ているからといって、全て遊び尽くせるはずがなく、どこから手を出せばいいかわからない程だった。

その年は山へ行った。祖父が新しく虫捕り網を買ってくれていたからだ。前の年に川で使って壊してしまったから、その事が嬉しくて朝から外へ飛び出した。昼には戻ってこいよ、と祖父の大きな声に負けないよう、大声で返事をした。

山の中は蝉の鳴き声で満たされていた。それ以外の音が聞こえない位だ。その音を追いかけてながら、見つけた虫を片っ端から捕まえに行った。蝉がいたこともあれば、全然違う虫もいた。何しろ何処を向いても蝉の鳴き声しか聞こえないのだ、まともにはわからない。

ただ勘で走り回ってた。

どれだけ遊んだかはわからないが、山の中を駆け回っていると、少し開けた所にでた。比較的平で、木や竹が生えていない、不思議な場所だった。落ち葉ばかりが広がるその中心には、たった一つだけ、墓標があった。

周りからういているそれをガキが興味を持たないはずがない。俺は一目散に中心の墓標に向かった。

『だあれ？』

墓標に後数歩と近づいた時、足が止まった。その墓標の方から声がしたからだ。突然の事に心が跳ねたものの、恐る恐る近づく墓標の後ろには小さな女の子が座っていた。紫に白い小さな花の入った着物を着て、肌の白い少女。

「俺はそつた。あんたは？」

着物なんて都会ならなんでもない日に着物など、すごく珍しく思うが、ここならそうでもなかった。珍しいが着ている子に会った事があるからだ。零ではないのだし、気にしなかった。

『瑠璃。』

小さく、おっとりとした口調で話す。手は前に重ねてそえている。そんな様子を見て、好意を覚えたのは否定しない。

「一緒に遊ば！」

だから、この言葉も当然だった。

『うん。』

口元を緩ませ、その娘は小さく頷いた。

それまでは急な坂も気にせず登っていたが、着物を着た華奢な少女にそんな事ができるとは思えなかった。だから、できるだけ平坦な道を歩いた。ときどき、その娘がふらつきそうになったら手を貸してやった。小さく白い手は少し冷たかった。

虫は捕まえてはいたものの、既にかなりの数を捕まえていたため、話をする方が多かった。ほとんど俺の都会話。凄く珍しいようで、いろいろ尋ねてきた。それに答えるのが楽しくて、いつしか虫を捕まえるのを止めていた。

平坦な道を選んでいたからか、いつしか山を抜け、少し先に川が見えた。去年網を壊した川だ。

「瑠璃？」

何も言わずに瑠璃が走り出した。どうしてなのかわからず、仕方なく後を追った。川に入っても変わわず、どんどん中へ入っていく。川の中央まで着てやっと止まった。少し荒げた息を整えながら、近づいていく。

「一体どうしたん？」

“才前毛”

「えー」

急に視界が沈んだ。何が起ったのかわからない。体が思うように動かない。息が出来ない。これは水？溺れてる！それだけの思考が一瞬で行われた。なんとかしないと、と体を死に物狂いで動かした。おかげで、一度水面から顔が出せたものの、すぐに沈んでしまった。泳ぎには自信があつた。だが、顔を出す二度目はなかった。足が動かない。いや、引きずり込まれているようにすら感じた。浮き上がる事もできず、息は程なくしてきれ、私は意識を失った。

前の年に川で遊んでいたときは祖父に川の中央から向こうには近づくな、と言われていたんだが、そんなことは忘れてしまっていた。急に深くなっており、子どもの私なんて頭も出ないほど深くなっており、場所によつては、大人でも肩まで来るようなところもあるらしい。溺れて死んだ人間も少なくはないそうだ。

気がついた時、私は病室のベッドで眠っていた。意識が戻ったのに気づいた母が私に抱き着いて泣いていた。父や祖父、皆が集まってきた。私が目を醒ましたのは、その日の夜だった。それから一部始終を話した。瑠璃と言つ名を出した時、祖父の顔が強張った。

『そんな者はおらん。嘘をつくな。』

いつもは温厚で、私の話をよく聞いてくれた祖父のそんな態度に、皆も固まり、結局、話は途絶えてしまった。

それから祖父とはまともに話す事はなくなった。私が避けるようになったのだ。それでも毎年祖父の家には行っている。花を持って。あの、山の墓標に、瑠璃に。あれ以来見ることはないが、彼女はここにいる。毎年、彼女の名の入った石を磨き、花を添える。祖父が

なんと言つても止めるつもりはない。意識のない中で響いたあの言葉、そして、今も残る手首のこの痣が瑠璃のものだと分かるから。

「ごめんなさい」

あの時、好きだと言つた、あの花を添えている。

これが、私の体験です。

2日目：花言葉は初恋（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回の霊は瑠璃という名の正体のわからない少女と、主人公を引きずりこんだ者たちでした。川のところに出たときに、瑠璃は怨念を抱いた彼らに操られ、川にまで連れて行ってしまい、自らを取り戻した彼女の手で、主人公は助けられた、という形です。瑠璃については、また別の話で書くことになるかもしれません。

3日目：ある旅館の一晩<鈴>（前書き）

ある旅館に泊まった三組の人間たちの一晩。鈴、紅（仮）、想（仮）のそれぞれで三組の人間たちについて書いていきます。今回は老夫婦の夫である、佐藤勝の話。

3日目：ある旅館の一晚<鈴>

暖かい電車から下りると、冷たい風が身に染みた。厚手のコートのポケットに逃げるように両手をつ込んだ。ここはこんなにも寒かったのだろうか。

駅から出ると雪が積もっていた。いつもよりも高いように思う。両肩が自然と震え、身体が寒さを訴えていた。早く温まりたいものだ。寒さから逃げるように、コートを押さえながら、すぐ前に止まっていたタクシーに走りこんだ。

『どちらまで？』

私が旅行には少し控えめに思える荷物と共に乗り込むと、人の良さそうな声が届いた。

「冬花旅館まで。」

昔何度か妻と行った思い出のある旅館。送迎バスがあるんだが、あまり大き過ぎる空間では落ち着かない。それに立ち寄りたい所もあった。先にその店に行くように頼んだ。

ものの五分程度、運転手と少し談笑していればすぐだ。目的の場所に着いた。道路脇に止めてもらい、風情を感じる店内に入る。“風蓮”という工芸展だ。引き戸を開けると、香の落ち着いた香りに酔う。

『いらつしゃいませ。』

店の風情によく似合う、紫の着物を着た、女性の声で我に帰る。店内を回り、装飾の入った小さな鈴を手にとった。妻はこの鈴が好きだ。来る度に一つ買い、財布やらなんやらにつけている。相当気に入っているのだから、土産にはびつたりだろう。

支払いを済ませ、タクシーへ戻った。雪が舞っていたが、あまり強くない事を祈ろう。

『奥様へのお土産ですか？』

首を少し捻り、人の良さそうな運転手が口にした。

「ええ。妻が好きなもので。よくわかりましたね。」

『あそこの鈴は夫婦で買つと縁起がいいとかで、買われていく方が多いんですよ。』

「そうだったんですか。」

言われてみると、妻もそんな事を言っていたように思う。鈴なんて付けない、というも拒んでいたため、私は買っていなかった。

その後はこの辺りの話をしていった。何度か着てはいたため、有名所は知っていたので、話は弾み、未開の場所は運転手の熱弁に興味を抱いた。短い時間ではあったが、とても有意義だった。

旅館に着き、運転手に別れを告げ、雪化粧をした木造の宿に向かう。雪は止みはしていないが、強くもなっていない。これもまた乙かもしれない。

懐かしい。何も変わっていない。この歳になると変わらぬものがありがたい。

『お待ちしておりました、佐藤様。』

妻と同年代ぐらいであろう、女将が出迎えてくれた。落ち着いた物言いの女将とは数回程度しか顔を会わしたことがないにも関わらず、顔を覚えてもらえた。彼女に先導してもらい、部屋へと通してもらえた。

『奥様のお加減の方はどうですか？』

「ええ。よくはなりましたが、まだ入院しています。せめて土産だけでもと。」

『毎年来て頂いてますものね。また来年お会いできる時をお待ちしておきます。』

そう言つて、女将は部屋を出て行った。妻が来れなくなったのは突然だった。出発の一週間前に突然家で倒れたのだ。そのまま入院したが、意識を取り戻してから旅行に行けないことを残念がっていた。せめて、あの鈴を買ってきてほしいと頼まれて来たのだ。本当は旅行など行くべきではないのはわかってはいるし、するつもりもなかったのだが、ああも彼女に頼まれては断る事もできなかった。一人での旅行など何年、いや、何十年振りだろうか。変に緊張しているのがわかる。

「…風呂に入ろうか。」

畳みの匂いが広がる部屋で座椅子に座り、テレビを流していたが、

別段興味のあるものでもなく、飽きてしまっていた。窓の外の雪は激しくなり、外出する気を削いでいく。腕に巻いた時計は五時を少し回っていた。風呂から出てくれば少し早いかもしれないが、夕食の時間だろう。無駄に時間を過ごしていてもいいが、飽きてしまつてはただの苦行でしかないからな。

風呂の支度をし、露天風呂に向かう。ここには混浴の露天風呂がある。妻とともに露天に入れるのが気に入っている点の一つだ。混浴に入ってくる人間もあまり多くなく、二人でゆっくりできるのだ。

今回は一人で来ているのだから、わざわざ混浴に入らなくてもいいのだが、やはりいつもの流れは崩したくない。それに人がいないだろうから、ゆっくり入れるだろう。

案の定、人の姿はなかった。開けた場所から見える雪景色を楽しみながらも寒さに負け、湯に近づく歩みを早める。桶で湯を掬い、湯を浴びる。外の寒さの中で湯の熱さが心地よい。湯船に片足をいれ、むつくりともう片方の足も沈める。体も沈めていくと、自然と声が漏れた。やはり、温泉はいいものだと思つた。雪が降り積もり、白で覆われている。遠くに見える山は雲で頂上が隠れてしまっている。天気がよければ綺麗に突き尖つた先が見えるのだが、少し残念だ。

ピシヤリ、と、後ろの戸が閉まる音が聞こえた。女性側の戸だ。誰かきたのか。こんな歳のいった男が混浴に一人で見るところを見られるのも嫌なものだ。もう少ししたら出てしまおうか。なんなら、他の露天風呂に入りなおせばいい。

『失礼します。』

桶で湯浴びをしたであろう後に、落ち着いた声が届いた。声の感じからはかなり若い声のように思う。顔を向ければ見てわかるのだろうが、それもどうかと前を見ているのだが、声の主は視界に入る位置に腰を下ろした。

横顔しか見えないが、顔立ちの整ったかなりの美人である。髪は黒く艶があり、清楚な雰囲気にも包まれている。昔の妻を思い出したが、それ以上に美しいと思った自分を恥じた。歳を踏まえて物事を考えるべきだと。

『綺麗な景色ですね。初めて来たんですが、また来てみたいと思いました。』

銀世界を眺めたまま、その声をかけてきた。私に話しかけているのだろうか？周りに誰もいないのだし、やはりそうなんだろうか。

「そうでしょう。私も妻と毎年着ているんですよ。」

『そうなんですか。素敵ですね、奥さんと毎年ご旅行されているなんて。』

「ハハ、ただ、普段は何もしてやれないので、そのお返しのようなものですよ。今年は妻がこれなくて残念でしたが。」

そこまで言うと、彼女はこちらに顔を向けてきた。疑問に思ったのだろう。こちらに向けた顔からはやはり若さを感じる。二十代前半だろうか。ただ、どこことなく影が見えたところが気になった。

『失礼ですが、奥様は？』

「ええ、病で倒れまして。重くはないのですが、旅行は控えようと。ただ、私には行ってきてくれといわれまして。毎年買う鈴を私に買ってこいというのですよ。」

『そうだったんですか。早く御元気になるといいですね。』

こちらが一人であることを話すと、やはり向こうが一人であることも気になってしまう。話の流れから聞こうか、と思ったが、気配を感じたからか、自然と口を開いてくれた。

『彼と二人できたんです。結婚も考えている真剣な相手なんです。酒に弱いのに、ついてすぐ飲み始めてしまって。今部屋で寝てしまってるんです。起きたときに混浴に言ったといって、少しは焦らせてやろうかと思って。』

納得していいものか、少し迷ったが、影の理由がそこにあるのかもしれないと、妙な詮索を入れてしまい、聞くのをやめることにした。

「心を許している証拠ですよ。お幸せに。」

少なくとも向こうはそんな事を望んでいないだろうし、私だって休みに来ているんだ。暗い話は聞きたくはない。せつかくの湯が台なしになってしまう。

『ありがとうございます。鈴を買いにこられたとおっしゃっておられました。が、どういったものなんですか？』

結婚を考えている、という話なのだし、丁度いいかも知れない。

「駅との間にある、“風蓮”というお店のものなんですがね。夫婦

が買つと縁起がいいとかで。小さくて、綺麗な装飾がされているものでして。よければ買いに行かれてはいかがですか？」

最後は余計なお世話かと、言い終わってから思ったものの、彼女は顔色一つ変えなかった。少々気にし過ぎだろうか。

『そうなんですか。食事を取る前に伺つてみようかしら。』

微笑みながらそう答える。その笑を見ていると、自分がここにいることが場違いに感じ、出ていくことにした。

「それではお先に失礼しますよ。」

『はい。お気をつけて。』

何気なく聞き流したものの、着替えの最中、ふと気になった。“お気をつけて”？一体なんの事だろうか。少し場違いな言葉に感じたが、また気にし過ぎなんだろうかと、考えるのをやめた。

温泉につかり、休めたためか急に空腹感を覚えた。夕食にしようか。ここの夕食は指定の時間帯であればいつ言っても構わない。まず、時間に追われずに済むのがいい。目の前で調理している様を見れる。そして、味も申し分ない。この点は私の譲れないところだ。妻は何度か他でも食べてみたかったらしいが、これだけは譲れなかった。少し悪いことをしたかもしれないと今になって思う。人とは愚かな生き物だ。全く。

『純、残すだなんて失礼だよ。』

カウンター席に着き、料理が来るのを待っていると、奥のテーブル

席から若い女性の声が聞こえてきた。先程の女性とは違い、明るく
楽しげな声だ。振り向くと年頃はあまり変わらないように見えるが、
髪は栗色で、渦を巻いている。今時の娘といった感じだろうか。背
を向けているため、顔は見えない。

『仕方ねーじゃん。食べねえんだから。璃音が食ってくれよ。』

向かいに座っている男もまさに今時の若者だ。髪は金で立ち上がっ
ている。ピアスをしていおり、全く周りの雰囲気と合わない。ほり
が深く、鼻が高いその日本人とは異なる顔立ちのせいでもあるのか
も知れない。よく通る声のせいか、音量の割に不快に感じる。もう
ほとんど食べ終わっているようなので、私の食事が来る前に出てい
つてくれることを祈るのみだ。

『仕方ないわね。それより、この後どうする？温泉に行く？』

盗み聞きするつもりなどないが、どうしても聞こえてしまう。

『うーん。風呂入る前に一度下りようぜ。なんかないか見に行こう。
それから風呂の方が気持ちいいぜ。』

悪くない考えだろうと思う。若いからだな。私はそのつもりなどな
いから風呂にも入ったのだ。何度も妻と温泉街を出歩いたものだ。
懐かしい。そういえば彼らくらいの歳に来たのが最初だったのでは
ないか？そうだ、その時に工具店のガラス細工を割ってしまったん
だ。妻とともに謝っていた。弁償しなくてもいいといってもらえた
が、居心地が悪く、代わりにと買った中にあの鈴があつたな。そう
か、“風蓮”に行ったのもその時が初めだったか。鈴があんなにも
多くなっていたのは当たり前なのか。早いものだ、過ぎたものは。
少し笑が漏れた。そんな回想にふけていると、食事が運ばれてきた

ことに気付かなかった。ふと見ると、先程までいたはずの男女がいなくなっていた。

「ごちそうさま。」

席を立つてこの場を後にした。やはりここの食事はいい。大満足だ。腕に巻いた時計を見ると七時になるところだった。普段ならばまだ風呂も飯もまだだ。しかし、今日は既にするのがなくなってしまった。部屋に戻ろうか。そう考えながら館内をうろついていた時だった。

『すみません。』

後ろから声をかけられた。どこかで聞いた声、と思い、振り返ると、後ろに先程いた若い男がいた。息を荒げ、走り回っていたことがわかる。青白い顔をしている。何かあったのだろうか？

「どうかしましー」

『璃音を見なかった、ですか？あつ、茶髪で俺より小さい女なんだけど。』

かなり焦っているらしく、口調がバラバラだ。目が震えている。先程向かいに座っていた娘の事だろう。見当たらないのか？

「いや、分からないがー」

『っ。クソ。』

誰に言うわけでもなく、そう言いながら、また駆け出そうとした。

咄嗟のこととただ見送ろうとしたのだが、突然右手に痛みを感じた。なぜか私の右手は彼の肩を掴んでいたのだ。

「ま、待ちなさい。」

同様しつつも、そういった。どうしてかはわからないが、そのままほおっておくわけにはいかない、そう直感した。

『なんだよ、急がないといけ—』

「これを持って行きなさい。」

渡さなければならぬ。どうしてそう思ったのか分からない。ただ、そうしなければならぬという使命感のようなものがあつた。“風蓮”で買った鈴だ。たまにはと思い、自分用にも一つ買い、持ち歩いていたのだ。彼は私の手の平にある鈴を見て不思議そうな顔をしていたが、勢い良くつかみ走りだした。

『ありがとう！』

首だけ振り向き、大声でそういう。迷惑だ、とも思いつつ、受け取ってくれたことに安堵していた自分がいて不思議だった。どうして私は渡そうと思ったのだろうか？考えたもわからないことだ。部屋に帰ることにした。彼はちゃんと彼女を見つけれらるだろう。そんな確証があつた。

部屋に戻り、布団を敷く。別段眠い訳でもないが、そうしたかった。鞆から寝る準備にいくつも取り出す。この天井の梁までは少し高いな。大した問題でもないか。ネットで見つけた画像を印刷してきた紙を取り出した。皺だらけになっているそれを伸ばしながら、描

かかっているとおりにする。何度か練習したが、不器用な為かよく失敗してしまった。コツは掴めたが、嬉しくもなるともない。力を入れても外れそうにない。問題なさそうだ。準備はできたかな。おつと、鈴を身につけておくのを忘れていた。妻用を買ったものだ。これを忘れてしまつては元も子もない。妻に会いに行っても渡せないではないか。

「よし。」

声に出して確認した。忘れ物はない。机の上に上り、最後の準備を整える。

「可奈子。今いくよ。」

一歩、歩みを進めた。

3日目：ある旅館の一晚<鈴>（後書き）

可奈子は二日前に倒れ、昨日の深夜に息を引き取った。私には倒れた直後にもう助からないことがわかった。私は一人になどなりたくはない。せめて、妻との思い出の地で思い出の品をもって行きたかった。こんな無責任な父を許してくれとは言わない。遺産と言えるものは殆ど無いが、好きにしてくれ。墓に私と妻をともにいれられるだけで、私は満足だ。

― 遺書 佐藤勝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4328h/>

想いの調べ

2010年11月24日05時31分発行